



イングランド中西部モウヴァン・ヒルズ地域の風景

自由と生活のために！

夏の終わりのある夕暮れ、人びとは村はずれにある牧草地を目指していった。狭く曲がりくねった田舎道。ほくも友人を隣にのせて、収穫したジャガイモを満載したトラックが前からこないとを祈りながら、車を走らせていた。九〇年代半ばの牛乳価格の急落以来、この辺りでも牧草地をジャガイモ畑に変えたところがいくつかある。それでもまだイギリスの農業はひどい不況の中におかれている。

この日、イングランド中西部にある調査地に戻るのは、友人たちのメールに促されたからだ。[ロンドンでのカントリーサイド・マーチに



クリスマスの翌日、恒例のパレードをおこなう



平日の朝、農家出発を待つ狐狩りの集団

参加することになったから帰ってこいよ。カントリーサイド・マーチとは、狐狩り禁止を牽制するためにロンドンで開かれることになっている大規模なデモのことである。ほくの調査地での集まりは、このデモを一週間後に控えた前夜祭だ。会場となる牧草地の真ん中には、廃材や枯れ木がうずたかく積み上げられていて、そのまわりではパーベキユをほおばったり、ビールをすすったりしながら、家族連れが楽しそうに談笑している。近くのプレップ・スクールの生徒たちが追いかけてこしたり、犬がじゃれあったりしているのを見ていると、とても抗議集会にはみえない。「ウェストミンスター」の連中が君のカントリーサイドを押しさえつげようとするのを許すな！」

「自由と生活のために！」と書かれた鮮やかな赤と緑の横断幕がなければ、どちらかといえば村の夏祭りの風情だ。

見ごろ・
食べごろ
人類学

貴族はどこだ？
狐狩りといえば、日本でもイギリスでも一般に貴族の娯楽という印象がある。階級を意識せずに暮らすことのできないイギリスにおいて、狐狩りが目の敵にされていた理由のひとつには、世襲によつて再生産されていく特権階級に向けた根強い反感がある。狐狩りをめぐる議論が感情的なものになりがちだったのは、それが階級闘争の一環として認識されていたためである。ピンク・コートとよばれる赤いジャケットに白い乗

馬用スポンと黒いブーツという出で立ちは、いかにも貴族を思い起させる。

でも実際には、その装束の人物が貴族である可能性はあまり高くない。狐狩りをおこなう集団のことをハントとよぶが、この近くでハントの世話役(マスター)をしているリチャードの職業は、エテコンの修理屋である。マスターはハントを代表する名誉職で、狩りの際には集団を先導する。いつか、ポロポロのランド・ローバーでほくを案内してくれたとき、彼は訥々とした調子で語ってくれた。

「俺たちは結構大変な思いをして馬を維持しているんだ。でも、こうやって休みの日に外へでてくるのが唯一の楽しみなんだ。子どもたちからずいぶんハントを追いかけてきたしね」

リチャードのような人びとは決して少なくない。しかし、確かに馬を維持していくには金がかかる。騎乗してハントに参加している人の多くがある程度の資産をもった人びとであることは否定できない。集まりの晩に見た真新しいレンジ・ローバーやBMWがそれを証明している。彼らの多くは、地主や自作農や実業家だ。

巨大なかがり火

あたりが薄やみに包まれ始めたころ、みんなは牧草地の中央に集まりだす。二〇〇人を超す人びとが見守る中、巨大なかがり火がともされる。歓声の中に狩猟用のラブバが高らかに鳴り響く。こうした光景がイギリス全土の各地で繰り返されているはずだ。

荷車で代用した即席のステージの上に、いつもの青い作業用オーバーオールを着たキースがいる。三代に渡つて小作農家を営んでいるキースを知らない者はこの土地にはいないだろう。一五で学



狐狩り禁止に反対してロンドン中心部でおこなわれた40万人デモ



あちこちに貼られたデモへの参加をよびかけるビラ



かがり火を囲む人びと

校を出てすぐに父親の農場で働き始めたキースは、自分自身狩りに出たことはない。その彼が、ここで狐狩りを擁護する演説をうっているのは、それが彼によつて貴族のスポーツなどではなく、自らが生まれ育ちそして働き続けているこの場所ですとおこなわれてきた「伝統的な」行為だからだ。「外部」の人間たちの趣味や好き嫌いで、それが多数決的に禁じられてしまうことに対して、彼は納得がいかないのである。

今日集まったほとんどの人たちも、キース同様狩りの経験はないはずだ。実際に狐狩りをおこなっているのはほんの一握りの人びとにしかならない。にもかかわらず、それが禁じられることに対して、これだけの人びとが反意を表明している。狐狩りがカントリーサイドとよばれる特別な空間と密接に関係してきたためだ。イギリスにおけるカントリーサイドは単なる田園空間ではない。少なくとも人びとの想像力の中では、カントリーサイドは独自の秩序をもつて自立した世界としてイメージされている。狐狩り禁止への反対を通じて、さまざま人びとがそれぞれの立場から表明するカントリーサイドへの強い思い。それがこの夜、全国で燃え上がった巨大なかがり火であった。

集会から二年半経った二〇〇五年二月、狐狩りは違法となった。

狐を狩る伝統

三枝 憲太郎
(さえぐさ けんたろう)
国立民族学博物館外来研究員